

第2部・ディスカッション

男女が認め合うスポーツの世界を！

スポーツを仕事とし、世界を舞台に活躍してきた4人のパネリストの話のあと、「スポーツに参加する時、女性であるがための差別を受けたことはなかったか」という司会者（三ッ谷洋子）の質問に対し、スポーツの世界における男女差別、男女比較論等についてディスカッションが行われた。

各パネリストがそれぞれの現状における諸問題を提示。女性の方が華やかに見えるということで、一部のスポーツにおいては若干の女性優位が見られるもの、プロスポーツの賞金格差、社会通念として黙認されている男女差別など、依然として存在している厚い“性の壁”が指摘された。これらの中には、単にスポーツという分野だけでは片づけられない問題も多く、その代表例としては結婚がもたらす障害があげられた。

この問題については、女性の社会との関わり方、あるいは女性や結婚についての社会一般の考え方が大きく影響しているという一致した意見だった。

すなわち、私たち女性の側から社会に働きかけ、社会一般の考え方、男性の女性に対する認識などを変えていく必要性が強調された。

さらに、スポーツという分野にだけ限って考えれば、体力やパワーの優劣のみで男女比較をし、女性スポーツを軽視している面も少なくない。

こうしてみると、男性がスポーツをするにあたっては、女性に見られる客観的状況における問題がほとんどない。やりたければできるという恵まれた状況に置かれている。しかし一方の女性にとっては、テニスやエアロビクスダンスとマスコミが取り上げるほど、ス

ポーツをする自由な時間、施設等がまだまだ不十分であるといえる。

結局のところ、男女いずれにとっても、スポーツは、あくまでスポーツであり、人間としてスポーツをすることの厳しさ、楽しさは同じはず。男女を意識する以前にひとりの人間として自分なりの姿勢でスポーツに関わるとき、誰でも同じようにスポーツのもつ良さを理解できるはずである。その前提にたって、男女の相互理解を深める必要がある。すなわち、「男女が認め合うスポーツの世界、および社会の確立」というところに全体の意見が集約された。

WSF Japanは、より多くの女性にスポーツの良さを理解してもらおうという意図がある。現在、男性の会員も抱えているという意味は、まさに今回、結論として出された「男女が認めあうスポーツの世界、および社会の確立」という大目標を達成するための最もよい方法と考えられる。このシンポジウムの結論を土台に、今年さらには組織として飛躍して欲しいと思う。

レポーター／寺井由美子

WSF Japan創立1周年記念シンポジウム

テーマ「スポーツに生きるとき」

日時／昭和58年2月1日火午後3時～5時

場所／西武百貨店池袋店8階スタジオ200

協賛／株式会社デサント

協力／西武スポーツ・池袋、WSF(米国・女性スポーツ財団)、日本家庭婦人卓球連盟、(財)日本バレーボール協会、全日本女子クレイ射撃クラブ



(財)日本水泳連盟
ナショナルチーム・
オフィシャル サプライヤー採用



スーパーフリーバック新登場

「アリーナ」は、水泳王国アメリカをはじめソビエトなど世界14か国のオフィシャルサプライヤーになっています



DESCENTE